

第一章 すべては神官殿の申されるまま

1

機織りの音が止んでい

し、しばらく前から、老人はそれに気づいていた。そして待っていた。また機が動き出すのを。しかし、待てども待てども、それは沈黙したままであった。

老人は、使い込まれて鮎色あめいろになった一枚板の机に向かい、その上に古文書の綴りつづりを何冊もひろげていた。舘窓しとみから吹き込んでくる微風が、徴かひの浮いた古文書の端と、老人の真つ白な長い鬚あごひげの先を震わせて通り過ぎる。

老人はわずかに頭をかしげ、耳を澄ませた。機織りの音に代わって、もしや泣き声が聞こえて

くるかもしれない。

御機屋は、何日も前に完成していた。お浄めも済み、いつでも使えるようになっていた。いや、すぐにも使い始めねばならなかったのだ。だが、オネは泣き叫んで嫌がり、御機屋に近づこうとさえしなかった。あまりにも残酷だ、やめてくれ、やめさせてくれと、老人の衣の裾にすがりついて訴えた。

老人には、その涙が涸れ果てるまで泣かせておくしかなかった。それから諄々と説いて聞かせた。いつかこうなることは、おまえも知っていたはずだ。あの子が生まれたときから、おまえにもわかっていたはずだ――。

昨夜の日暮れ時から真夜中までかかつて説き伏せ、何とかこの夜明けに、オネを御機屋に連れて行くことができたのだ。そしてようやく、重たげな機織りの音が始まったのに、今はもう止んでいる。

老人は窓の外に目をやった。木立の葉が揺れている。鳥が歌っている。光はまぶしく、陽射しは暖かい。しかし今この村には子らの声もなく、村人たちは、畠を耕すときでさえ、ひっそりと息をひそめている。畝を巡るのは力強い鋤の音ではなく、嘆きを含んだため息だ。狩りに出た者たちも、山の獣道を獲物を追ってたどりつつ、やはりふと足を止めては、長い吐息をついてこの村を見おろしているかもしれない。

生贄の刻。

この老人――トクサ村の村長は、今年七十歳になった。彼が彼の父親からこの座を引き継いだのは、十三年前のことである。そして、まだ壮年の男だった老人が、新しい村長として、父のやれなかつたこと、父がやろうとしなかつたことのあるこれを手で成し遂げようと考えをまとめ始めた矢先に、あの子は生まれた。間もなく二エとなるうとして、あの不幸な子供は生まれた。

あのころ、村長の父はすでに深く病み、身体も気も弱っていた。それでもあの夜、ムラジとスズの赤子に角が生えている、角のある子が生まれたぞという報せを聞いたときには、一種の感慨と悲哀に満ちた顔をして、決然と床を蹴って起きあがった。そしてそのまま村の産所へ赴き、自らの手で生まれたての赤子を抱き取り、その小さく柔らかな頭を探って、角の存在を確かめた。

それから父親は、家に戻って息子を呼んだ。扉も部も閉て切り、燈火の芯を短くして明かりを落とすと、ともすれば夜風にまぎれそうなほどの低い声で語りだした。

「わしはおまえに、なかなか村長の座を譲ろうとしなかつた。おまえが立派な村の男として皆の信頼を集めていることは知りつつも、あえておまえの頭を押さえていた。おまえはそれを、ひそかに不満に思うこともあつたらう。わしは知っていた。しかし、それを責める気はない。おまえが不満を持つのは当然だったのだから」

村長は、声もなくただうなだれた。父の顔が怖かった。病み疲れた老人のはずの父親が、なぜかしら急に、異形のもののように恐ろしく見えたのだ。

「しかし、わしが村長の座にしがみついていたのは、何も未練があつたからではない。ただだ、おまえに二エのことを背負わせなくなつたからだ。わしは臆病風に吹かれた。遅かれ早かれおまえに任せねばならぬことなのに、それを先延ばしにしたかつた。しかしそれは誤りだつた。

霧の城におわすお方は、わしらの浅はかな了見などお見通しだ。見るがいい。わしが病に負

けて、ようようおまえに村長の座を譲った途端に、角のある子が生まれ出た」
村長の父の声は、泣いているかのように震えていた。

このトクサの村では、何十年かに一人、頭に角を持った子供が生まれてくる。生まれたての赤ん坊の時は、角は目立たない。赤子の薄い髪の毛の下にさえ隠れてしまうほどの、円くてなめらかな突起に過ぎない。

角を持って生まれた子は、角のない子供よりも丈夫に育つ。すくすくと手足が伸び、身体は健康で、病気ひとつしない。子鹿のように野を駆け、うさぎのように跳び、栗鼠のように木に登り、魚のように泳ぐ。

その子が育つてゆく間、頭の角は、依然として、髪の下にひっそりと眠っている。だから一見したところ、その子は普通の子供たちと、何ら変わるところがないようにも見える。ただその子が抜きん出て元気で、いくつもの森を越えて響き渡る狩人の声と、知恵に輝く瞳を持っているということだけを除けば。

しかし、頭の角は、まがうことなき「しるし」であった。その子がニエであることのしるし。やがてその子が「霧の城」へ行かねばならぬというしるし。村が背負わされた、きつかりのしるし。

「霧の城」がこの世にかけた、呪いの楔のしるしでもある。

その子が十三歳になると、角はその本性を現す。一夜のうちに急速に伸びて、頭の両側に、まるで小さな水牛のそののように、髪を分けて姿を現すのだ。

それこそが「生贄の刻」である。

「霧の城」が呼んでいる。時は満ちた。その子をニエとして捧げよと。

村長の父は言った。「先のニエが生まれたのは、わしが幼い子供のころのことだった。古文書には、一人のニエが生まれ、生贄の刻が来て「霧の城」に送られてから、次のニエが生まれ落ちるまで、百年もあいたが、あいたという事例もしている」

辛そうに目を閉じ、首を振った。

「わしらにも、そういう幸運が訪れると良いと願っていたが、かなわなんだ。おまえの代には、ニエの子を見ずに済むようにと、わしは心を尽くして祈ってきたのに。むしろ、今度は早い。おそらく、先のニエは力が弱かったのだろう」

だから「霧の城」は飢えを覚え始めているのだと、父は言った。

「それでも、今夜生まれたあの子が十三歳になるまでの猶予はある。そのあいだに、わしはおまえに、ニエを送るしきたりについて、おまえが知らねばならぬことを教えよう。おまえは我が家に伝え置く古文書もひもとかねばならぬ。とはいえ、難しいことは何も無い。やがてあの子が十三歳になり、「生贄の刻」が来たれば、帝都から神官殿が来て、すべてを手配してくださろう。おまえはただ、神官殿の申されるままに従えば良いのだ」

村長の父は、思いのほか強い力で村長の手首をつかんだ。

「それよりも肝心なのは、ニエの子を逃がさぬことだ。あれをこの村から出してはならぬ。そしてそれに、自らの運命を、厳しく、子細に、よくよく言い聞かせなければならぬ。手加減をしてはいけない。弱気になつては駄目だ。あの子は「霧の城」が指さしたニエなのだから」

村長は怯えた。ほんの今しがた生まれたばかりの赤子。何と愛おしく、弱々しく、大切なもの

に思えたことか。ニエのしるしを持つているといつても、いとけない赤子であることに変わりはない。いったいどうやって厳しくすればいい？ 生まれたときから、おまえはいずれ霧の城に捧げられる命なのだ、どんな言葉で語り聞かせればいいのかというのだ。

しかし、そういつて父に抗弁するだけの勇気が出てこなかった。だから代わりに、弱々しく聞かされた。

「それでも、あの子を逃がさずに留め置くことはできても、もしかしたら病にかかるかもしれない。怪我をするかもしれない。十三歳まで育てずに死んでしまうかも——」

村長の父は、きつぱりと退けた。

「ニエの子は病にかからぬ。怪我もせん。並はずれて丈夫なのだ。だから村長としておまえがなすべきことは、あれが狼のように孤高に、鳩のように柔和に、己の運命に逆らわぬように育てることだけだ」

「育てる——？」

「そうだ。今夜生まれたあの子は、村長の手で育てる」

「しかし、親はどうします？」

「産後の母親が起きあがるようになったらすぐに、この村から放逐する」

「そんな」

「それも、し、き、た、りだ。ニエの子、角の生えた子をなした夫婦は、このトクサの村を離れなければならぬのだ」

そこで初めて、村長の父の表情が緩み、目尻が濡れた。

「酷な仕打ちに聞こえよう。だが、これはむしろ慈悲なのだ。やがて必ず引き離されるとわかっていながら、赤子を育てる親の辛さはどれほどのものだろう。定められている別離なら、早い方がいい。それにムラジとスズの夫婦は、帝都で安楽に暮らせるはずだ。赤子はまた産めばよい。三人でも五人でも、望むだけ産んで育てればよい。いかに貪欲な霧の城も、ひとつがいの男女から、二度までもニエを奪い取ろうとはなさらぬ」

村長は父の強い口調に圧されて、何も言えない。ようやく、己の妻の名を呟くのが精一杯だった。

「オネ……」

「そうだ、妻は何と思うだろう？」

村のしきたりについては、妻も彼と同じく、話で聞いて知っているだけのはずである。そこに自ら関わらねばならなくなったことを知ったなら、彼女はどうするだろうか。

「オネには何と**言え**ばよいのでしょうか」

彼は妻とのあいだに、六人の子をもうけた。そのうちの四人は、何やかやの災いや病で、いくらかも育たぬうちにとられてしまった。育ちあがったのは、息子が一人と娘が一人。失った子たちの分まですくすくと育ち、立派に成人した。息子は嫁取りも済ませた。

「私とオネに、赤子など……これから育てられるでしょうか」

「育てられるとも。孫のようなものだ」

村長の父親は、抜け落ちて不揃いになった歯をちらと見せ、酷薄な笑いを浮かべた。

「考えてみるがいい。今夜あの子が生まれたおかげで、遠からず恵まれるだろうおまえの孫は、

角を持つて生まれる運命を免れ得たのかもしれない。そう思えば、苦勞など感じぬだろう」

村長は身震いをした。確かにそうだ。今夜二エが生まれたおかげで、今後何十年かは安心して暮らせる。私の孫は免れた。が、背中を走る冷たい震えが、それに対する安堵からのものなのか、そういうことを言つてのける父親に対する恐れから来るものなのか、自分でもわからなかった。

父はまだ村長の手をつかんでいた。それをさらに固く握り直して揺さぶりながら、村長の耳の底まで叩き込もうとするかのように、一語一語、語気を強めてこう言った。

「肝に銘じておくのだ。村長は恐れてはならぬ。村長は疑つてはならぬ。これは村の罪ではなく、ましてや村長の罪でもない。我らはしきりに従うだけだ。すべて神官殿の申されるままに従うだけだ。それさえ無事になしとげれば、霧の城は満足してくれる」

すべて神官殿の申されるままに。すべて神官殿の——村の罪ではない——この村は——この村の村長は——村長は——

「村長」

呼びかける声。呼ばれているのは自分だ。老人は十三年の時を駆け戻り、長い顎鬚と痩やせて枯れた肩を持つ七十歳の今に返つて目をしばたいた。

「恐れ入ります。おじゃまでしたか」

戸口のところに、野良着姿の村の男たちが数人、肩を寄せ合うようにして立っていた。

「いや、少し調べものをしていただけだ」

男たちは譲り合うように顔を見合わせ、ようやく一人が口を開いた。

「オネ様が御機屋で泣いておられます」

「ひどく暴れて、機を壊そうとされました。私らで押さえました。どうにもお気持ちがおさまりませんようで……」

なるほど、機織りの音は依然止んだままである。

「わしが行つてみよう」

村長の老人は、机に両手をついて、ゆらりと椅子から腰をあげた。

オネ——オネよ。どうかもう泣かないでおくれ。村長は心のなかでお願いした。

オネよ。幾度言い聞かせたらわかってくれるのだ。どれほどの涙も、どれほどの怒りも、通じはしないのだということ。どれほど高く天に拳を突き上げようと、どれほど強く地を掌で叩いて嘆きの叫びをあげようと、すべて無駄なのだということ。

遠く西の彼方、陽の沈むところ、地の果ての断崖にそびえ立つ、古の霧の城。そこには、我らの声は届かぬ。かの城主の怒りを和らげ、その呪いを、たとえしほしのあいだであっても遠ざけることができるものは、ただ、選ばれし二エだけなのだということ。

2

頭の上の方から、小石がころころと転げてきた。ひとつ、ふたつ。

少年は起きあがると、岩屋のいちばん高いところに、ぼつかりと開いた小窓を見あげた。岩を

砕き、削り取ってこしらえたその小窓の縁は、長い長い年月を風雨にさらされ、すべすべと円くなっている。

その真ん中に、ひよこんと、小さな顔がのぞいた。

「おい、おい」と、その顔は呼んだ。「いるんだろ、おい」

少年は微笑んだ。トトだ。

「うん、いるよ」

どうやってあんなところまでよじ登ったものか、トトは小窓の縁に片手をかけている。

「何だよ、寝ぼけた顔をしてさ。まだ寝てたんかい？」

確かに少年はごろりと横になっていたのだ。この岩屋では他にすることがない。

「トト、ここへ来たたら叱られるよ」

少年の言葉に、トトは口を尖らせた。

「へっちゃらだよ。誰にも気づかれてない」

「でも——」

「ゴチャゴチャ言うなよ。せつかく差し入れを持ってきてやったんだから」

トトは言って、白い布袋を投げ落とした。少年は急いで拾い上げ、中を見た。果物がひとつ、焼き菓子の包みがひとつ。

「ありがとう」

トトはフンと鼻を鳴らして照れた。

「見張りのおっさんに見つからないように食うんだぞ」と、まるで年長の男みたいな口振りです。

告する。「見つかったら、取り上げられちまうんだろ？」

「そんなことはないよ」

少年は笑った。見張りは厳しいが、けつして意地悪ではない。交代でやってくる村の男たちの、誰もが親切だった。ただ、彼らは一樣に、少年の目を避けていた。日に三度の食事を運んできてくれるときも、寒い夜に火を焚きにきてくれるときも、怯えるように、謝るように、うつむいたり脇を向いたりして、用が済めばそそくさと出てゆく。

「なあ、イコってばよ」

トトはちよつと声を小さくして、少年の名を呼んだ。

「おまえ、逃げたくないか？」

少年——イコと呼ばれた角のある少年は、岩屋の窓から目をそらし、灰色の壁を見つめた。この岩屋は、村の北側にある。もともとここにあつたごつごつした岩山を、手掘りでくりぬいて造りあげたもののださうだ。もちろん最初から、「生贄の刻」を迎えた二エの子を、神官殿が来られるまでのあいだ、閉じこめておくために造つたのである。

その後の年月が、岩屋の壁から、石切斧や打ち斧の刃の痕をきれいに消してしまった。掌で撫でてみても、つるつると滑らかな感触が伝わってくるだけだ。

それほどに遠い昔からの決まり事。

この村のしきたり。

イコの頭には、いろいろな言葉が浮かんできた。今の気持ちを説明するには、たくさんの言葉が要る。それを上手に選び出し、並べて口にするだけの自信がない。なにしろ、イコはまだ十三

歳だった。

結局、こう答えた。「逃げられないよ」

トトは両手で小窓の縁をつかむと、ぐいと頭を突き出した。「そんなことあるもんか。逃げられるよ。おいらが手伝ってやる」

「ダメだよ」

「ダメじゃねえって。ゼツタイ逃げられる。夜になったらここを抜け出して、森へ入っちゃえばいいんだ。牢の鍵は、おいらが盗み出して開けてやる」

「だけど、逃げてどこへ行くの？ これからどこで暮らす？ 他所の町や村には行かないよ。すぐ見つかったら、連れ戻されるだけだ。この頭の角を見たら、誰だっけ？ 僕が二エだっけ？ 気に気づくもの」

「山で暮らせばいい。ケモノを狩って、木の実を採って、土地を耕して畑を作ってさ。おまえですごく身体が丈夫だし、力も強いから、きつとやっていかれるよ」

そこまで言っただけで、ちよつと怒ったようにぐいと口を尖らせてから、トトは付け足した。

「もちろん、おいらも一緒だ。二人で山で暮らそうぜ」

トトはイコよりもひとつ年下だが、さらに幼い弟と妹たちがいて、とても可愛がっている。あの子たちを捨て、家を離れて暮らすなんて、彼にできるわけがない。寂しくて寂しくて、死んでしまおうだろう。

それでも、トトは口先だけで言っているのではない、本気なのだ。イコは感じた。

その本気が、辛かった。トトはイコのいちばんの友達だ。いちばんの友達が、こんなふうと思

い詰めてしまっている。そうさせているのは誰でもない、この僕だ。

「トト、ありがとう」

「なんだよ、よせよ」

「だけど、やつぱり無理だよ」

「おまえ、そんなイクジナシだったか？」

「僕が逃げたら、村が大変なことになる。二エが行かなかつたら、霧の城が怒ってしまうから」

村だけではない。帝都でさえも滅ぼされてしまうだろう。一夜のうちに。いや、それどころか、またたきするほどの猶予もないかもしれない。

トトは急に怒り出した。

「だから何なんだよ。大変なのは、どう大変になるんだよ。霧の城、ってのは、そんなにおつかないものなのか？ 父ちゃんも母ちゃんも、話をするのも嫌がるんだ。母ちゃんなんか、耳をふさいで逃げちまう」

嫌がっているのではない。話してはいけないという決まりがあるのだ。それもしきたりの内だ。霧の城は、たとえはずみで口に出された悪口であろうとも、聞き逃すことはない。刃向かう者を許さないのだ。けっして、けっして。

「十五歳になったら、成人の儀式があるだろ。そのときにわかるよ。村長が、詳しいことをちゃんと教えてくださるよ」

「おいらは、今、知りたいんだ」トトは大声を出した。「何にも教えてもらえないまままで、澄

ましていられるかよ。おまえ、霧の城に連れていかれたら、もう帰ってこれないんだろ？
おいらは嫌だよ。友達がそんな目に遭わされるのに、黙っておとなしくなんかしてられるかよ」
「だけど僕は二エだもの」

「頭が生えてるからか？ どうしてそれが二エの証なんだよ。だいたい、誰がそんなこと決めたんだよ」

だから、それがいきなりなんだってば——と言いかけて、イコは口をつぐんだ。

ふん。ふんと怒っていたトトは、にわかになを落とす。「イコ、おまえは——いろいろ知ってるんだろ。教えてくれよ。このままじゃ、おいら、たまらないよ」

イコはうなだれた。自分の知ったこと、この目で見えたものを誰にも話してはいけないと、村長からは厳しく止められている。

あれはもう何日前のことになるのか。一夜のうちにイコの頭の角が大きくなると、村長はすぐに、イコがある場所に連れて行った。馬にまたがり、往路に三日、帰路に三日。狩人も足を踏み入れることない、北の禁忌の山を越えて。道中では誰にも会わなかった。頭上を飛ぶ鳥も見かけず、下草のなかに兎の気配もなく、雨上がりのぬかるんだ道に、狐の足跡もなかった。

そこがどうして「禁忌の山」と呼ばれているのか。どうして誰も近づかないのか。どうして生き物の気配がないのか。すべての疑問は、峠に立ち、眼下に広がる光景を目にした瞬間に氷解した。

村長は言った。「おまえをここに連れてきたのは、霧の城の怒りがどれほど恐ろしく、二エの果たす役割がどれほど大きいか、しっかりと知らしめるためだ。二エにしか、霧の城を鎮

めることはできぬ。二エがその役割をまっとうせねば、これほどに悲惨なことが起こる。よくよく心に刻んでおくれ。そして、どうか背中を向けて逃げ出すことなく、その責任を果たしておくれ」

今も、その声が耳の底に残っている。

自分が二エであることを、イコは子供のころから知っていた。ずっと、そのように育てられてきたのだから。

毎日の暮らしのなかでは、村の子供たちと何ひとつ変わることはなかった。イタズラをすれば叱られ、良いことをすれば褒められる。畑仕事や家畜の世話。読み書きを学び、川で泳いだり木に登ったり、一日は早く、夜の眠りは平和で暖かい。頭の角も、まだ髪の下に隠れていたから、イコ自身でさえも、まったく気にしていないときが多かった。

それでも、イコは自分が二エであり、他の子供たちとは違う存在であることを知っていた。村長が、どんなときでもイコがそれを忘れないように、静かに根気強く言い聞かせてきたから。

しかし、そうやって重ねられてきた村長のどんな言葉よりも、禁忌の山の峠から見る光景の方が強かった。それはイコに、有無を言わず、己に課せられた使命の重さを痛感させた。イコは思わず、片手をあげて自分の頭の角に触れた。二エのしるし。この惨事を防ぐことのできる、選ばれた者である証。

どうして逆らうことができるだろう。どうして逃げ出すことができようか。

帰路では、イコはもう決心を固めていた。茫漠としていた二エとしての役割が、自分のなかではつきりと形を成していた。幼い少年の、その腹の据わりように、先を行く村長が、馬上で密か

に涙を落としていたことには気づかないまま。そして村に戻ると、強いられることもなく、自分から進んでこの岩屋に入ったのだった。

「よし、わかった」

トトがまた声を張り上げたので、イコはびくりとして我にかえた。

「わかったって、何が？」

「誰も教えてくれないなら、おいら、自分の目で確かめる。おいらもおまえと一緒に行くよ。霧の城、までついて行く」

とんでもない話だ。イコは飛び上がり、小窓のすぐ下の壁に張りつくと、懸命に訴えた。

「バカなことを言うもんじゃないよ！ 神官殿に知れたら大変だ。トトだけじゃない、小父さんおじも小母さんおぼも、弟や妹たちまで捕まえられて、牢屋に放り込まれちゃうよ。みんなをそんな目に遭あわせていいのかい？」

トトはひるんで、ちよつとまばたきをした。でも言葉は強気のままだ。

「なんで捕まるんだ？ なんでおいらが霧の城へ行っちゃいけないんだ？ ニエしか行っちゃいけないのか？ だったら神官たちだって行っちゃいけないんじゃないかよ」

「そういうのを屁理屈っていうんだ」

「おまえ、どっちの味方なんだよ？」

わけがわからなくなってきた。イコはトトの怒りで真っ赤になった顔を仰ぎ、ふつと力が抜けて、吹き出してしまった。もちろん、心から可笑おかしいわけでも、笑いたいわけでもない。それでも笑ってしまうのはなぜだろう。

友達だからだ。トトがいい奴だからだ。そのトトともう会えなくなる。ああ、それだけは、どんなにか寂しくてつまらないことだ。トトは本当にいい奴なんだもの。

でも、だからこそ——僕が霧の城へ行く意味もあるんじゃないか。

「霧の城」が怒るとどうして怖いのか、どんなことが起こるのか、たしかに僕は知ってるけれど、教えるわけにはいかない。決まりなんだから、破っちゃいけないんだ。西風の吹く日には淵ぶちで泳いじゃいけないとか、馬の蹄ひづめを削らずに山道を登らせちゃいけないとかいうことと同じだよ。だから、成人の儀式まで待ってよ」

イコはできるだけ穏やかに話した。

「でも、ニエが行けば、その怖いことを防ぐことができるっていうのは、ホントだよ。それにね、トト。霧の城へ行っても、ニエは死ぬわけじゃないよ」

「だって、もう帰ってこれないんだろ」

「そうだけど、でも死ぬわけじゃないんだ。村長が言った。霧の城へ行ったニエは、霧の城の一部になって、永遠の命を与えられるんだって」

これは嘘じゃないし、慰めでもない。本当に村長がそう言ったのだ。最初は、イコも驚いた。てつきり命をとられるとばかり思っていたのに、そうじゃないというのなもの。

「永遠の命……？」トトは疑わしげに呟いた。

「じゃあ、おまえは霧の城でずっと暮らすってことか？」

「うん、そうだよ」

具体的にどういふことなのかは、イコにもわからない。実は村長も知らないのじゃないかと思

う。
そしてこの事柄は、イコの心に、密かな好奇心も植えつけた。霧の城に行ったら、何が起るのだろうか？ 霧の城の一部になるといえるのは、どういうことなのだろうか？

トトは納得しない。「村長は、何でそんなことを言えるんだ？ 見てきたわけじゃないくせしてさ」と、舌鋒鋭く食い下がる。

「神官殿に教えてもらったんだって」

「じゃ、神官は全部知ってるんだな？」

「もちろんさ。帝都の大学者なんだからね」イコは先回りして釘を刺した。「だけどトト、神官殿が村に来て、あれこれ訊ねたりしたらいけないんだよ。さっき言ったのは、脅かしじゃない。本当に捕まえられちゃうよ。僕は、僕のせいでトトたちが牢屋に入れられたりするなんて、嫌だからね。トトがあんまり言うことをきかないと、村の人たち全員がお咎めを受けることになるかもしれないだし」

不満げに口を尖らせ、やつとこさ、トトは「わかったよ」と答えた。

「よかった」イコは心から言った。安堵のため息が出た。

「でもおいら、また来るよ。それに、すっかり諦めたわけじゃないしな」

言い捨てて、トトは小窓から離れてしまった。イコはあわてて呼びかけた。

「諦めたわけじゃないって、どうするつもりなんだよ？」

「教えてやんない」

「これは遊びじゃないんだ。本当に大変なことなんだよ。わかっているのか、トト？」

「わかってるって。じゃあ、またな」

元気に返事を投げ返して、トトは去ってしまったようである。イコはまだしばらく、小窓を見上げて突っ立っていた。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。